



4th STAGE

男声合唱組曲

「北斗の海」

- I Bering-fantasy
- II 窓
- III 風景
- IV 海
- V エリモ岬

作詞：草野心平  
作曲：多田武彦  
指揮：広瀬康夫

4th STAGE

男声合唱組曲 北斗の海

草野心平／詩 多田武彦／曲

◆「北斗の海」初演時の多田武彦による曲目解説

詩人草野心平先生の家は西武線所沢から徒歩で30分位のところにある。まわりには、新興住宅がぼつぼつ立ちはじめているとは謂え、まだまだ樗や櫟が雑木林が散在し、雨上りの午後などには何ともいえない奥ゆかしさがただよっている。

早大グリークラブからの委嘱作品をつくるに際して、私は、この団体の伝統的な力強さを念頭におくことにした結果選んだのが、草野心平先生の一連の海の詩である。結局、「Bering-fantasy」「窓」「風景」「エリモ岬」の4曲からの構成とし、この表題を頂くために先生のご自宅を訪問した。「北斗の海」というこの組曲の表題は、こうして草野心平先生ご自身の手で生まれた。

草野先生の家の中には、先生が旅先でとってこられた小枝をさし木して育てられた色々な木が植えられてある。木だけではなく、下草などにも、そういうものがある。名もない植物を小さいうちから育てて行くところに喜びを見出しておられるのである。

庭の手前には10平方メートルばかりの池がつくってあって、そこには数十匹の大小の鯉が飼ってある。丁度餌をやる時間だったので、先生は「一寸、失礼」と言って台所に行くので、ありあわせのソーセージを細かく刻んで持って来られた。水面に先生の手がびしゃびしゃ動くとき、鯉たちが一せいに先生の手を吸いに来る。「うなぎもいるんですよ」と言われるので見ると1メートルぐらいのが4、5匹もいた。帰途、途中まで犬の散歩かたがた送って下さったとき、私が「この辺は武蔵野の風情が残っていていいですね」と言うと、「それもいいけれども、こういうのも、いいんですよ」と言って指差されたのが、雑草のそばに、一つだけ咲いていた松葉ぼたんであった。

「富士山」や「天」や「北斗の海」などのスケールの大きい詩を書かれる先生が、植物を育て、鯉を愛し、こうした人がかえりみない様な自然の寸景に感動される場面に接した私は、あの独特な低い声とともに、先生の別の一面を発見出来たような気がした。

草野先生の詩に惹かれて私が作曲した今迄の作品は、昭和31年の組曲「富士山」と、36年の組曲「草野心平の詩から」であるが、前者は精力的過ぎて、後者は音程等が難かし過ぎて、両方とも各大学グリークラブ泣かせの作品になってしまっている。にも拘らず両方とも広く愛唱されているのは、一に、草野先生の詩の偉大さと美しさによるものだと私は思っている。今回、組曲「北斗の海」を作るに当たって、私は前2作の難かしさを何とか改めようと思ったが、草野先生の詩の真髄に近づこうとすればするほど、安易な表現方法は採れなくなってしまった。特に第1曲「Bering-fantasy」では吹雪をあらわすホルタメントの連続の箇所、第2曲「窓」では、終始感傷的な甘さは絶対許されない次元での透きとる様な詩情の表現、第3曲「風景」では、短時間内の強烈な凝集美の表現、第4曲目「エリモ岬」では、溢れ出ようとする感動を、一歩手前で押えこんで、しみじみと表現しなければならない点、などにおいて、またまたグリークラブ泣かせの組曲となってしまった。

しかしながら、前2作は詩そのものだけを通しての制作であったが、今回は、前述した様な草野心平先生の姿や声を想い出しながら、先生が海にのぞんで此等の詩を考へておられる図を私なりに想定して作曲して行ったので、そういった意味での親近感を、この組曲に対して感じる結果となっている。